

日本語能力試験が台湾の高等日本語教育に

与えた影響についての一考察

Effects of Japanese Language Proficiency Test on Higher Education of Taiwan

銘傳大学応用日語学系
王 敏東
徳島大学留学生センター
Gehertz 三隅友子

Abstract

This work investigated how the Japanese Language Proficiency Test, which has been held continuously for over 20 years, affects the Higher Education of Taiwan. Particularly, the impact was discussed separately on “effects of Japanese Language Proficiency Test on courses of Japanese departments”, “available textbooks in Taiwan”, and “research papers discussing the effects and/or impact of the Japanese Language Proficiency Test”. The following observations were noticeable.

1. Since the last few years of the 20th century the Japanese Language Proficiency Test started impacting the Higher Education of Taiwan;
2. The impact of the Japanese Language Proficiency Test on Japanese education intensified with time in the present century.
3. It is expected that the impact of the Japanese Language Proficiency Test on Higher Education of Taiwan will keep growing. Further observation is needed to detail such an impact.

はじめに

日本語能力試験は、実施されはじめてから二十年余り経ち、台湾だけでなく、世界においても重要視されている。たとえば、中国大陸、香港でも台湾と同じように、大学などで「日本語能力試験」を目標とする科目が開講されている¹。

台湾ではこの試験を受ける受験者が年々増えている²。日本語学科³の学生も、それ以外の人も受験しており、小学生から年配の人にいたるまで、年齢層も幅広い。大学の日本語学科の学生なら、卒業する前に、1級に合格することを目指すのが普通であり、当試験の成績はすでに就職、進学などに、広く利用されている。また、市販されている関連の参考書も、増える一方である。

試験は1～4級に分けられ、1級が一番難しい級で、4級は難易度の最も低い級となっている。各級とも「文字・語彙」、「聴解」、「読解・文法」という3科目から構成されている。各級及び各科目が要求するものの具体的な内容について、以下主催機関が公表した資料(表一)を引用する。

1984年に開始され、台湾では1991年より実施されはじめたこの試験は台湾の高等日本語教育にどういった影響を与えただろうか。頼(2007b)は、台湾の各大学で日本語能力試験を教学の目標とする課程が開講されている様子を概観し、アメリカ、ヨーロッパ、韓国、中国大陸と台

湾の日本語教育スタンダード (Standard : 指導基準) における目標や評価などと照合の上、日本語能力には日本語能力試験で測れない部分が相当あることを指摘し、「(日本語能力) 試験に合格することを台湾の大学日本語学科学生の卒業条件にすることに賛成しかねる」と主張している。

表一

級	構成			認定基準
	類別	時間	配点	
1	文字・語彙	45分	100点	高度の文法・漢字(2,000字程度)・語彙(10,000語程度)を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような、総合的な日本語能力(日本語を900時間程度学習したレベル)
	聴解	45分	100点	
	読解・文法	90分	200点	
	計	180分	400点	
2	文字・語彙	35分	100点	やや高度の文法・漢字(1,000字程度)・語彙(6,000語程度)を習得し、一般的なことがらについて、会話ができ、読み書きできる能力(日本語を600時間程度学習し、中級日本語コースを修了したレベル)
	聴解	40分	100点	
	読解・文法	70分	200点	
	計	145分	400点	
3	文字・語彙	35分	100点	基本的な文法・漢字(300字程度)・語彙(1500語程度)を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力(日本語を300時間程度学習し、初級日本語コースを修了したレベル)
	聴解	35分	100点	
	読解・文法	70分	200点	
	計	140分	400点	
4	文字・語彙	25分	100点	初歩的な文法・漢字(100字程度)・語彙(800語程度)を習得し、簡単な会話ができて、平易な文、または短い文章が読み書きできる能力(日本語を150時間程度学習し、初級日本語コース前半を修了したレベル)
	聴解	25分	100点	
	読解・文法	50分	200点	
	計	100分	400点	

また、林・呂(2007)も、日本語能力試験が台湾の産業、政府機関、学界、民間に及ぼした影響に触れながら、この試験の「できること」と「できないこと」⁴を提起している。しかし、上記の頼(2007b)と林・呂(2007)もともに日本語能力試験が台湾の高等日本語教育に大きな影響を与え、大切な役割を担っていることを認めている。また、頼(2007b)、林・呂(2007)は各学科のホームページなどにより日本語能力試験に関する課程の開講状況を整理したが、実際に教授している教師などの関係者に対する、教育現場の実態調査などには及んでいない。

以上の事情をふまえ、本稿は「各日本語学科のカリキュラム」、「教材」及び「日本語能力試験に関する研究」という3つの側面から、具体的な事例をあげながら日本語能力試験が台湾の高等教育に与えた影響を検討する。上記の3つの側面から考察する理由は次の通りである。

①カリキュラムは教育内容を学習段階に応じて配列したもので、台湾ではいずれの大学の学科においても慎重にデザインされ、学科・学部・学校という3段階の会議で決定されたうえ、教育部(文部科学省相当)に提出されることが義務付けられている。したがって、学科のカリキュラムはその学科の教育内容及び学習段階の配列を十分反映されるものだと分かる。

②教材は、「どんな教科書を使っているかを聞いただけで、どんな教育がなされているか想像することができるのである」(国際交流基金『日本語教科書ガイド』(1983:3))と言われるように、教育において非常に大切な位置を占めていることは言うまでもない。

③日本語教育の現場からの要請は常に日本語研究を進展させ、逆に日本語研究も日本語教育の実践における根拠的な存在に位置している。とくに、大学で日本語教育に携わっている教師は研究者でもあり、教育の場で直面させられている問題と、自分の研究とを結び付けることが可能であると思われる。したがって、教師たちの大学における日本語能力試験に関する研究ぶりを分析すれば、台湾におけるこの方面の研究のおおよその全体像がつかめるとと思われる。

1. 日本語能力試験と各日本語学科のカリキュラム

2007年春（2006学年度：2006年8月～2007年7月のこと、各学年度は前年の8月～翌年の7月となっている）現在、台湾には32の日本語学科が存在する⁵。各大学の日本語学科の詳細は下表（表二）のようになっている。また、各大学の日本語学科のカリキュラムに日本語能力試験が開講されている様子も同表に提示する⁶。

表二

学科の性質	大学名	成立年	能力試験に関する授業を開講している様子
伝統的な日本語学科	静宜(?)	1999	—
	政治(2004)	1989	—
	世新(2006)	2002	—
	台湾(2006)	1994	—
	淡江(?)	1966	—
	東海(2006)	1992	—
	東吳(2005)	1972	—
	文化(?)	1963	—
	輔仁(2005)	1969	—
応用日本語学科	育達(2006)	1999	・三年生下半期/必修/2単位/週に2時間 ・四年生上半期/選択/2単位/週に2時間
	義守(2006)	2002	—
	開南(2006)	2005	・四年生上半期/必修
	高雄第一(2006)	1997	—
	景文 ⁷ (2003)	1996	・三年生1年間/必修/0単位/週に2時間
	興国(2006)	2000	・三年生1年間/必修/0単位(2009年2月より開講する予定)
	呉鳳 ⁸ (2006)	2006	・四年生下学期/必修/0単位/週に2時間
	修平(2006)	2005	・四年生1学年/必修/2単位/週に2時間
	真理(2006)	1997	—
	台中(2005)	2000	—
	大葉(2006)	2000	・三年生下学期～四年生上学期/必修/2単位/週に2時間 ⁹
	淡江(技)(2002)	1997	—
	致遠 ¹⁰ (2006)	2000	・二年生/必修/週に2時間
	致理(2007)	2003	・二年生1年間/選択/4単位/週に2時間
	長栄(2006)	2002	△ ¹¹
	南台 ¹² (2005)	1998	・四年生下学期/必修/0単位/週に2時間
	南榮(2006)	2001	△ ¹³
	文藻(2003)	2001	—
	屏東商業技術学院(2006)	2000	・二年生下学期/選択/2単位/週に2時間 ・三年生1年間/選択/4単位/週に2時間 ・四年生上学期/選択/2単位/週に2時間
	銘傳(2006)	1995	△ ¹⁴

	明道 ¹⁵ (2006)	2001	—
	立德(2006)	2000	・四年生1年間/必修/4単位
	和春(2006)	1999	・二年生1年間/選択/4単位 ・三年生1年間/選択/4単位 ・四年生1年間/選択/4単位

表二で分かるように、日本語能力試験と関連があると思われる授業は台湾における数多くの大学の日本語学科のカリキュラムに見られるが、それらはいずれも1996年以降設立された応用日本語学科である。その中にはさらに、これらの授業を必修科目と定めている学科が多い。それに対して、いわゆる伝統的な日本語学科（または歴史の比較的長い日本語学科）ではそのようなものは見られない。これはいわゆる応用日本語学科の設立の方針によるもので、同時に伝統的な日本語学科と区別する特徴の1つとも考えられる。ただし、これは伝統的な日本語学科では日本語能力試験を重要視していないということではない。たとえば東呉大学の場合では、長栄のような能力試験に合格した学生に受験料を補助する学則がある。他に、たとえば廖(2001)、頼(2007a)などによると、文化大学の日本語学科では2級を通らなければ卒業できないという規定があるそうで、能力試験の成績が学生の日本語力の到達点を客観的に判断できる重要なチェックポイントとされていることが窺える。

また、開講されている学年については、2年生のところもあるが、ほとんど3年生と4年生に集中していることが分かった。単位数はほとんど1学期に2単位となっており、また、週間の授業時間数は2時間となっている。

一方、カリキュラムからだけでは通常察知できない「開講されている目的」、「授業の進み方」、使用教材等について知るため、実際に日本語能力試験に関係する授業が開講されている16の学科を対象に、アンケート調査を実施することにした。調査時間は2007年3月～5月で、11校から計18部のアンケートが回収された¹⁶。以下、調査結果をまとめる¹⁷。

開講目的としては「日本語能力試験に合格すること」、「就職に有利」、「資格を持たせる」、「日本語能力の向上」が多く取り上げられており、しかも実際に期待通りの効果を得たという。それに対して、「(留学を含む)進学に有利」と思っている学科・教師はさほど多くはなかった¹⁸。

授業の進め方は「説明・解釈」と「小テスト」が最も多く利用され、次は「(大量の)練習」となっている。そのせいか、「授業全体が退屈になりがち」という教師の声もあった。

このような条件のもとで、「文字・語彙」、「聴解」、「文法・読解」という3科目それぞれに使われる時間または割合はどうなっているだろうか。まず、「文型・文法」が一番重要視されていることが分かった。次は「聴解」と「文字・語彙」である。そして最後は「読解」となっている。

教材については、過去実際に出題された問題集はもちろんのこと、能力試験のために編纂されている市販の教材が最も多く使われている。たとえば『出題傾向対策日本語能力試験2級文法』(松岡龍美・辻信代、1994、大新書局)、『出題傾向対策聴力聴解1級』(磯邊公子・香取文子著、1996、大新書局)、『日本語能力試験考前题库文字語彙1級』(鈴川佳世子・香取文子編著、1996、大新書局)、『日本語能力試験考前题库文法2級』(鈴川佳世子・香取文子編著、1996、大新書局)、『完全掌握2級文法』(アジア学生文化協会留学生日本語コース著・林進(他)訳、2004、大新書局)、『完全掌握1級文法』(アジア学生文化協会留学生日本語コース著・林進(他)訳、2004、大新書局)、『新基準対応日本語1級能力試験対策文法篇』(佐々木仁子・松本紀子著、2004、大新書局)、『新基準対応日本語1級能力試験対策文字・語彙篇』(佐々木仁子・松本紀子著、2004、大新書局)、『新基準対応日本語能力試験対策1級読解編』(佐々木仁子・松

本紀子著、2004、大新書局）、『題型解析 日本語能力試験 1 級 文法問題集』（大阪 YWCA 専門學校、2005、大新書局）などが用いられている。他にたとえば『適時適所日本語表現句型 500』（友松悦子・宮本淳・和栗雅子著、1997、大新書局）、『日本語文型辞典』（砂田有里子（代表）、1998（徐一平等翻譯繁体字中文版、2005）、くろしお出版）、『日本語文字、語彙活用対策』（黒茜・陳柏壽編著、2003、新文京開發）、『日本語表現文型ノート』（岡本牧子・氏原庸子・砂辺太郎著、徐興慶譯、2006、致良出版（もと大阪 YMCA 日本語教師会））等も利用されている。これらの教材は書名からも察知できるように文法・文型のものが多く、文法が当該授業で重要視されていることが分かった。このような教材の使用状況からは、如何に試験志向であるかということも同時に観察できた。

全体的に、この授業は各日本語学科で開講されてからの歴史がまだ浅く、これからより長期的な観察が必要である。が、今開講中の学科は基本的にこの授業にプラスの評価を施しており、今後続けて開講していく意向を示した。

2. 日本語能力試験と教材

台湾では近年日本語能力試験に関する教材が多く出版されている¹⁹。そのような現象は台湾人が作った教材に限って言えば、本世紀に入ってから盛んになってきている、と唐（2006）の調査で明らかにされている。以下、鄭（2005）と唐（2006）に基づき、台湾で出版されている台湾人が作った日本語能力試験に関する教材を、改めて整理すると表三のようになる。

表三²⁰

分野別	文字・語彙	聴解	読解・文法	全体（総合、またはとくに科目を問わず）
数量	15	1	8	3

表三で分かるように、台湾で出版された台湾人が作った日本語能力試験に関する教材はとくに「文字・語彙」と「読解・文法」に偏っている。

また、調査範囲を広げ、国家図書館のホームページ（全国図書書目资讯网聯合目錄資料庫）を利用して検索すると、台湾の各図書館に所蔵されている日本語能力試験に関係する教材は598種（異なり数）もあり、その内容を試験の科目別で分けると次表（表四）のようになる²¹。

表四

分野別	文字・語彙	聴解	読解・文法	全体（総合、またはとくに科目を問わず）
数量	161	72	140	225

まず、科目別に見れば、「文字・語彙」のものが最も多いことが分かる。それに対して聴解のものは少ない。また、科目を問わない総合的なものの多くは、過去実際に出題された問題を集めたものである。

出版年代については、前世紀の最後の数年より現われるようになり²²、今世紀に入ってから増えてきたことが明らかにされている。

作者の国籍について見ると、初期の段階では日本人作者によるものが多かったが、後に中国人独自で製作したもの、または日本人と中国人が協力して共に作ったものも出ている²³。

また、特定の出版社が能力試験に関連するものの出版にとくに熱心であることも分かった²⁴。

3. 日本語能力試験と研究

日本語能力試験について、台湾大学の趙（2000、2001a、2001b、2001c、2002、2005 など）の「文法」に関する検討、銘傳大学の王・郭（2005、2006a、2006b）、または林（2006）がまとめた「読解」の様子から見れば、日本語能力試験は台湾の日本語（教育）に関連する研究テーマとして取り上げられていることが分かる。上記の論考の多くは能力試験実際の出題を分析したものである。

また、国家図書館全国博碩士論文資訊網 (<http://etds.ncl.edu.tw/theabs/index.jsp>) で検索したところ、日本語能力試験そのものについて論及した学位論文は4本ある²⁵。それぞれ廖（2001）『日本語能力試験1級に出る接続助詞の一考察』、盧（2005）『台湾市售初級日語教科書之語彙與句型分析—以高中生使用日語能力測驗4級教材為例—』、鄭（2005）『日本語能力試験が求める「文字力」及び「語彙力」—台湾、中国、日本の日本語教科書の分析を通して—』と、葉（2007）『日語能力測驗的S-P表分析—以1級文法項目為中心』である。葉（2007）は日本語能力試験における1級文法の出題について論じるもので、廖（2001）、盧（2005）と鄭（2005）は教科書に提示されているもの（語彙、句型など）を、実際の出題または『出題基準』にリストアップされた関連の資料にあわせて検討したものである。

一方、王（2001）が2001年当時一番新しく出版された関連のある論文集（11冊に掲載されている100本の論文）を調べ、発表された論文の内訳を整理したところ、日本語能力試験に関する論考はほとんど見当たらなかったが、王（2007 予定）は改めての調査で、そのような論考が現われるようになってきていることを明らかにした。

このように、台湾の研究者が日本語能力試験について論究し始めたのは今世紀以降のことであることが分かる。そのような研究の勢いは今後ますます盛んになりつつあると予想できよう。

4. むすびにかえて

以上の考察により、1984年（日本国内では1983年）に開始され現在にいたる日本語能力試験が、台湾の高等日本語教育の「各日本語学科のカリキュラム」、「教材」及び「日本語能力試験に関する研究」などの面に影響を及ぼしつつあることが分かった。

開始当初日本語能力試験は、熟達度テスト（特定の学習に基づかない、様々な学習経歴を経た受験者の今の能力を測るもの）であったが、その後1994年に「日本語能力出題基準」が公開されたことにより、到達度テスト（特定のシラバスに基づいた学習後その達成能力を測る）に変化を遂げていることが、菅井（2006）によっても指摘されている。

日本語能力試験合格が各大学で教育目標となるならば、目標達成のためのカリキュラムやシラバスの変化、教材そして教育方法や教授法の開発にも結びつくことは容易に考えられる。本稿はその流れの中での具体的な影響を調査により、明示することを試みた次第である。

また、2002年から始まった日本留学試験（EJU）は、外国人留学生の日本の大学（学部）等に入学を希望する者について、大学で必要とする日本語力及び基礎学力の評価を行うことを目的としている。両テストの役割が明確になった今、日本国内では今後日本語能力試験は、新たな大学入学のために特化しない、より幅広い日本語能力測定さらに学習奨励といった到達度の側面を強化させていくことが予想される。が、台湾の日本語教育、特に大学においては、日本の大学に入学する目的がない場合には、やはり日本語能力試験を到達目標とするカリキュラム、教材、研究がますます増大すると予想される。今後より長期的な観察が必要だと思われる。

付記並びに謝辞

本研究におけるアンケートを調査する中、銘傳大学の学部生、蔡宇涵と劉昱屏両氏の卒業論文（王敏東指導）にも関連データが必要となったため、部分的なアンケートは蔡宇涵、劉昱屏と王敏東の連名にしています。本結果を蔡、劉両氏の卒業論文にも利用する予定です。

また、日本語能力試験の教育的な意義に関しては、筆者の王、三隅がそれぞれの立場（海外の台湾と日本国内）から、協議し本稿の作成となりました。

調査にあたり、多くの日本語学科の関係者より協力を得たことをこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

<参考文献>

- ・王敏東（2001）「二十一世紀の日本語研究についての私見」『二十一世紀的日本研究国際会議論文集』台湾大学・台湾日語教育学会
- ・王敏東（2007（印刷中））「台湾地区大学日語教育之分析—課程、師資及研究」『日語研究』5
- ・王敏東・郭晏汝（2005）「日本語能力試験における3、4級「読解」テキストの分析—「文字・表記」及び「語彙」を中心に—」『日本語教育研究』49
- ・王敏東・郭晏汝（2006a）「日本語能力試験における1、2級「読解」テキストの分析—「文字・表記」及び「語彙」を中心に—」『日本語教育研究』50
- ・王敏東・郭晏汝（2006b）「日本語能力試験における「読解」テキストの分析—「文型」及び「文章」を中心に—」『日本語教育研究』51
- ・何志明（2006）「日本語能力試験2級対策コース—合格までの3か月の挑戦—」、The Seventh International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies、香港
- ・国際交流基金（1998）『日本語教科書ガイド』、北星堂書店発行
- ・国際交流基金・（財）日本国際教育協会（2002）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』、凡人社
- ・趙順文（2000）『日本語能力試験』文法試題的類型研究『台湾日本語教育論文集』4、台湾日語教育学会
- ・趙順文（2001a）『日本語能力試験』における文法1・2級の研究（2）—以動詞為例『台湾日本語教育論文集』5、台湾日語教育学会
- ・趙順文（2001b）『日本語能力試験』における文法1・2級の研究（3）—接詞型を中心に『二十一世紀的日本研究国際会議論文集』台湾大学・台湾日語教育学会
- ・趙順文（2001c）『日本語能力試験』における文法1・2級の研究（4）—以名詞型為例『台大日本語文研究』2、台湾大学日本語学科
- ・趙順文（2002）「2級文法機能語的分類問題」『台湾日本語教育論文集』6、台湾日語教育学会
- ・趙順文（2005）「日語一級文法試題量化分析與S-P表分析」『台湾日本語教育論文集』10、台湾日本語教育学会
- ・鄭憶秋（2005）『日本語能力試験が求める「文字力」及び「語彙力」—台湾、中国、日本の日本語教科書の分析を通して—』高雄第一科技大学応用日本語学科修士論文
- ・鄭惠如（2005）『台湾と中国大陸・香港の三ヶ所における日本語関係の書籍の交流—台湾を出発点として—』、銘傳大学応用日本語学科修士論文
- ・唐翠蓮（王敏東指導）（2006）『我國自製日語教材之調查研究』、大專生參與（国科会）專題研究計畫 94-2815-C-130-005-H 報告書

- 葉亞婷 (2007) 『日語能力測驗的 S-P 表分析—以 1 級文法項目為中心』 台灣大學日本語學科碩士論文
- 賴錦雀 (2007a) 「台灣的大学入試への日本語科目導入案」 『東吳大學日本語文學系 2007 年日語教育國際會議』
- 賴錦雀 (2007b) 「台灣日本語教育における「日本語能力試験」の位置付け」 『「外語能力測驗之動向與展望」 國際學術會議論文集』
- 廖志偉 (2001) 『日本語能力試験 1 級に出る接続助詞の一考察』 中國文化大學日本語學科修士論文
- 林長河・呂惠莉 (2007) 「「日本語能力試験」與應用日語系的課程及教學」 『「外語能力測驗之動向與展望」 國際學術會議論文集』
- 林芃葦 (2006) 『「日本語能力測驗」 1、2 級「讀解」問題研究—以「注釋」為討論對象』、銘傳大學應用日本語學科專題研究報告
- 盧怡汝 (2005) 『台灣市售初級日語教科書之語彙與句型分析—以高中生使用日語能力測驗 4 級教材為例—』 輔仁大學日本語學科碩士論文
- 教育部 <http://www.edu.tw/>
- 行政院國家科學委員會 <http://web.nsc.gov.tw/>
- 行政院新聞局
<http://info.gio.gov.tw/ct.asp?xItem=18902&CtNode=2617&mp=4>
- 交流協會
http://www.koryu.or.jp/taipeitw/ez3_contents.nsf/14
- 國際交流基金
http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2004/taiwan.html
- 國家圖書館全國博碩士論文資訊網
<http://etds.ncl.edu.tw/theabs/index.jsp>
- 財團法人語言訓練測驗中心
<http://www.lttc.ntu.edu.tw/JLPT.htm>
- 獨立行政法人 日本學生支援機構
<http://www.jasso.go.jp/eju/result.html>

<參考資料>

台灣における各日本語學科のホームページ：

- 育達商用技術學院應用日語學系
<http://w3.ydu.edu.tw/jap/default.asp>
- 義守大學應用日語學系 <http://www.aj.isu.edu.tw/>
- 開南大學應用日語學系 <http://aj.knu.edu.tw/>
- 景文技術學院應用日語系 <http://www.jwit.edu.tw/~appjadep/>
- 興國管理學院應用日本語文學系
<http://www.hku.edu.tw/teach/jap/index.htm>
- 修平技術學院應用日語系 <http://ibm3500.hit.edu.tw/aj/>
- 真理大學應用日語學系
http://www.au.edu.tw/ox_view/edu/jap/index.htm
- 靜宜大學日本語文學系 <http://www.pu.edu.tw/~japan/>

- ・政治大学日本語文學系 <http://140.119.172.157/main.htm>
- ・世新大学日本語文學系 <http://cc.shu.edu.tw/~jp/>
- ・台中技術学院応用日語系 <http://adm.ntit.edu.tw/jl/>
- ・大葉大学応用日語學系 <http://www.dyu.edu.tw/%7Edj5220/>
- ・台灣大学日本語文學系 <http://ccms.ntu.edu.tw/~japanese/>
- ・高雄第一科技大学応用日語系 <http://www.jp.nkfust.edu.tw/>
- ・淡江大学日本語文學系 <http://jpweb.jp.tku.edu.tw/>
- ・淡江大学応用日語系 <http://www2.tku.edu.tw/~ttjxb/index2.htm>
- ・致理技術学院応用日語系
<http://www.chihlee.edu.tw/dept/aj/index.htm>
- ・長栄大学応用日語系 <http://www.cju.edu.tw/h-japanese/>
- ・東海大学日本語文學系 <http://www2.thu.edu.tw/~japan/>
- ・東吳大学日本語文學系 <http://www.scu.edu.tw/japanese/>
- ・南栄技術学院応用日語系 <http://192.192.208.215:8080/>
- ・南台科技大学応用日語系 <http://www4.stut.edu.tw/japan/>
- ・中国文化大学日本語文學系 <http://www2.pccu.edu.tw/CRGAJL/>
- ・文藻外語学院日本語文學系 <http://www.wtuc.edu.tw/japanese/>
- ・屏東商業技術学院応用日語系 <http://www.npic.edu.tw/%7Edaj/>
- ・輔仁大学日文系 <http://www.jp.fju.edu.tw/>
- ・銘傳大学応用日語學系
<http://www.mcu.edu.tw/department/applang/japan/index.htm>
- ・明道管理学院応用日語學系 <http://www.mdu.edu.tw/%7Edaj/>
- ・立德管理学院応用日語學系 <http://www.jap.leader.edu.tw/>
- ・和春技術学院応用日語系 <http://www.doajl.fotech.edu.tw/>

<注>

1. 香港の場合はたとえば何志明（2006）の考察がある。
2. ちなみに、国際交流基金「日本語能力試験のひろば」
(<http://momo.jpf.go.jp/jlpt/home.html>) に、世界における受験者や通過率など公式の詳しい資料が公開されている。2005年と2006年における台湾の応募者はいずれも5万人前後である。
3. 本稿で論じる「日本語学科」はすべて「応用日本語学科」を含む。「応用日本語学科」は専ら1996年以後設立され、日本語（またはプラス日本文学、日本文化など）以外に商業的な知識等もすべてカリキュラムに入れ、日本に関することを重点的に教授する日本語学科のことを指す。
4. たとえば各学科の特色が発揮できないこと、話す能力と書く能力というアウトプット能力の測定不能、試験が教学をリードする不合理さ、外国語学習の面白さと異文化理解の軽視、年末に行なう年に1度だけの試験という形式が台湾人学生にとって不都合である点などである。
5. 外国語学科の下に設けられている「日語組」は対象外とする。
6. 「伝統的な日本語学科」と「応用日本語学科」に分け、大学名の50音順にしたがう。また、能力試験に関係する授業が開講されている様子については各学科のホームページに公開されている最新学年度の「課程（カリキュラム）」に基づいた。各学科名の後ろの（）内に示されている数字は年度数である。ただし、該当学科のホームページでは年度数が察知できない場合はやむを得ず提示しない（「(?)」で表わす）こととした。また、文化大学の日本語学科のカリキュラムもホームページでは察知できないが、該当学科に所属の知人を通して、関連する授業が開講されていないことが確認できた。開講されていない場合は「—」で示す。なお、正式にカリキュラムに入っていないが、別な形で開講されている場合は「△」で示し、必要に応じ改めて

注を付けて説明する。調査時期は2007年3～5月である。

7. 「日本語能力試験における2級(または以上)に合格することが要求される。が要求される。未達成の場合、日本語能力試験に関する科目を履修(さらに試験に合格)する義務が付く」、「1級を通れば履修しなくてもいい」という備考がある。

8. 該当学科の前身は「応用外語科」の「進修部二専日文組」(1997年に設立)で、2002年より「応用外語系(学科)」(「応用外語組」があり)となり、2006年より「応用日語系(学科)」として独立している。後述するアンケート調査を通して、他に四技1、2、3年生と夜二専1年生における関連する選択科目が開講されており、こちらの方ではそれぞれ週に2時間(2単位)となっているということも分かった。

9. 「卒業專題」(卒業論文(該当学科では必修科目)にあたる)という授業の「日文検定組」の場合を指す。

10. 2006年秋、本研究における予備調査の時、「必修」科目であることだけが分かった。2007年春、再調査したら、各クラスの時間割だけが見られ、単位数については察知できなかった。

11. 毎年不定期に開講されているが、正式な体制内の授業ではない。2007年春の資料(2007年2月7日より該当学科のホームページに提示されていた「952日検2級準備班授課時間表」)によると、数多くの教師が1人あたり2～4時間ほど担当し、併せて約3ヶ月あまりのカリキュラムとなっている。該当学科では他に日本語能力試験における1級を通ったら受験料全額、2級を通ったら半額を補助するという学則がある。

12. 後述するアンケート調査を通して、他に関連する選択科目が1つ開講されていることも分かった。

13. 2006年秋予備調査の時、必修科目とされていることだけが分かったが、2007年春に再調査したら、該当学科のホームページは見られない状態となっていた。知人を通して手に入れた2006年度のカリキュラムを確認したところ、選択科目に「初級日語能力総合練習」(二年生上学期、週に2時間)、「中級日語能力総合練習」(三年生上学期、週に2時間)と、「高級日語能力総合練習」(四年生上学期、週に2時間)とあるのが分かった。

14. 銘傳大学の応用日本語学科は、2005学年度(2005年9月)入学の学生が適用するカリキュラムに関連の授業(「高階応用日語能力実習」)を4年生の必修科目として開講する予定である。銘傳の「高階応用日語能力実習」は学校側の「学生により多くの資格・ライセンスなどを取得してもらおう」という方針で定めたもので、「日本語能力試験1級合格の証明で履修しなくてもよい」という付記のように、1級に合格していれば履修しなくてもいいが、1級に合格していなければ履修する義務がある。また、該当学科では2003年より、二年生の「句型」(文型)という選択科目で担当教師の意志で主に2級文型を教授している。なお、2006学年度、三年生の「文法Ⅱ」という選択科目で、担当教師が学生の希望にしたがい、主に1級文型を教授している1クラス(履修人数は35人)がある。なお、長栄と似たような、能力試験を通った学生に受験料を補助する学則を2007学年度より導入する予定となっている。ちなみに、2007年5月の該当学科における「文法」及び「文型」の教学検討会(教学卓越計画の一部)で、試験に合格することを目標とし、大学のカリキュラムに入れることの妥当性について若干検討されていた。本稿は2007年現在日本語能力試験が実際に台湾に与えた影響を論ずるもので、それを大学のカリキュラムに入れる妥当性についての検討は別の機会に譲りたい。

15. 該当学科のカリキュラムに能力試験に関する科目は含まれていないが、「学生が卒業する前、日本語能力試験1級に合格するべきだ」という備考がある。

16. 学科宛にアンケートを出したが、3クラスの教師が別々に回答したケースが3校、2クラスの教師が別々に回答したのが1校あった。

17. 詳細は文末の「付録」の通りである。

18. たとえば、近年日本留學試験(EJU)に参加している台湾人は毎回200～400人前後となっており(<http://www.jasso.go.jp/eju/result.html>)、能力試験に受験する人数にはとても及ばない。また、各日本語学科のカリキュラムとして進学を目指したもの、または日本留學試験(EJU)で何点をとらないと卒業できないと規定している学科は見当たらない。そういう意味で日本留學試験が台湾の高等日本語教育に与えた影響は日本語能力試験ほどでない分かる。関連の論考は別の機会に譲りたい。

19. たとえば鄭恵如(2005)の調査結果などである。

20. 1冊の本に2つの分野の内容が入っている場合は両方の分野で計上する。
21. 2007年3月中旬に「日本語能力試験」、「日本語能力試験」、「日語能力」、「日語検定」、「日語検定」、「日検」をキーワードとして検索した結果に基づき整理した。表三と同じように、1冊の本に2つの分野の内容が入っている場合は両方の分野で計上する。
22. 管見の限り、1990年のもの（たとえば佐々木仁子・松本紀子『日本語能力試験対策日本語総問題集文法・読解編』講談社）が最初だった。次の年に台湾の出版社が携わるようになってきている（たとえば日本外国語専門学校（1991）『日本語実力養成問題集日本語能力試験対策用』が鴻儒堂によって出版された）。
23. 管見の限り、1994年にはじめて台湾人作者のもの（たとえば楊鳳慈『能力試験4級単字語彙』尚昂出版）が見られるようになり、1996年に日本人作者のものが中国人によって翻訳や注釈・説明が付いているものが現われるようになってきている（たとえば松岡龍美・辻信代編著、張永旺譯『日本語能力試験:出題傾向対策・2級・文法』大新出版）。また、1999年より日本人と中国人が共著のものも出てきている（たとえば白寄・入内島一美・林瑞景編著『日本語能力試験對應漢字・語彙問題集1級』鴻儒堂）。
24. たとえば大新（252種）、致良（50種）、三思堂（38種）、鴻儒堂（30種）、尚昂（25種）、宇田（21種）などである。
25. 調査時期は2007年2～5月。